

# 学報

スポーツ文化の風を発信する

# NITTAIDAI

# 34

2013.Spring

巻頭 学長エッセイ「幸せな人生を築く方法を発見しよう」— 1

中長期事業方針及び平成25年度事業計画 — 2

## 特集 ■ チャレンジ

陸上競技部 長距離・駅伝ブロック — 3

バレーボール部(女子) — 7

「体育科学をリードする」 ~大学院研究科の取組み~ — 9

海外研修報告 ● デンマークの幼稚園・保育所事情 — 11

Campus Guide ● 図書館を利用しよう — 12

クラブ情報 ● 2012年度下半期クラブの主な大会成績 — 13

NEWS ● 2012年度下半期ニュース — 13

INFORMATION ● dot.NITTAIDAI — 15



# チャレンジ

箱根駅伝総合優勝報告のため、安倍晋三自由民主党総裁を表敬訪問。(平成25年2月6日)



昨年のロンドン五輪の記憶はまだ鮮明だが、すでに新しいチャレンジが始まっている。目標は高く定めなければならない。困難があるならば乗り越えなければならない。だからこそ、チャレンジが価値あるものになる。日体生、とりわけ新たに仲間に加わった新入生諸君には大いに期待したい。さて、本学もチャレンジを続けていかなければならない。スポーツへの期待はかつてないほど高まっている。世界中の人々の幸せや健康のため、そして未来のために、私たちに課せられた使命は重い。新学部開設を追い風に、新しい一歩を力強く踏み出していきたい。いわば日体大は一つのチームである。学生はもとより、教職員、卒業生、関係者、それぞれのチャレンジが一つになって、社会や時代を動かしていく。日体大の一員であり、一人ひとりそれぞれの人生の主役であることを誇りに思ってください。

# Challenge



日本体育大学  
日本体育大学女子短期大学部  
学長 谷釜了正  
たにがま りょうしゅう

## 学長 エッセイ 幸せな人生を築く方法を発見しよう

### スポーツの役割の再発見

日本体育大学は122年の歴史を刻んできました。1894年に結成されたIOC（国際オリンピック委員会）の119年の歴史とほぼ重なることから推し量れるように、本学はオリンピック史とともに歩んできたといっても過言ではありません。昨年のロンドン・オリンピックに23名もの選手を輩出し、金銀銅のメダルを日本にもたらしています。現役の5名の学生がオリンピックとして活躍、うち4名が入賞を果たしました。また、この4月に3名のオリンピックが入学します。本学のオリンピック史を新たに彩る布陣です。大いに期待したいと思っています。

この一方で本学は伝統ある体育学部に加えて、4月から新しい学部（児童スポーツ教育学部）をスタートさせます。幼児期から小学校児童のための教育と研究のための拠点になることを目指します。スポーツの指導がしっかりできる人材、つまり保育園・幼稚園及び小学校の先生を養成します。これによって本学はスポーツを通して0歳から100歳までの国民の心身の健康教育を担うことができるようになります。

本学は、4月から、新入生を迎えて在生学生とともにスポーツの役割を再発見します。そして、各自が生かされて生きていることを自覚した上で、幸せな人生を築くことのできる方法を共に発見するよう努め、いまを生きる人びとのととろへ運んで、楽しく輝いて生きることのできる人生の手助けを、学生と教職員の協同にて、遂行していきます。



# 中長期事業方針及び平成25年度事業計画

日本体育大学・日本体育大学女子短期大学部

## ① 事業方針

我が国は、近年、少子高齢化が進行するとともに、厳しい経済の状況下にある。18歳人口が減少し高等教育への進学率が伸び悩んでいることから、各大学は国立、私立を問わず、多様な入試改革を行うための方策を講じて学生確保に努めつつある。これに加えて体育及びスポーツの分野では、有名私立大学をはじめとして関連分野の学部及び学科の新増設が相継ぎ、この分野の専門大学として最も長い歴史と伝統を誇る本学においても学生確保の問題は看過できない状況にある。さらに、全国的規模で学生を誘ってきた本学は、現下の経済不況と全国的な規模での関連学部・学科の新増設とによって首都圏からの学生が多くを占める大学へと変容している。しかし、全国的に指導者を輩出してきた本学は我が国の体育及びスポーツの奨励と普及を図り、明るく豊かで活力のある社会形成の助けを使命としてきたことから、このような状況を危機として受け止めねばならない。優秀な学生を全国から確保するための入試の在り方の工夫と改善、新しい受験生を掘り起こすための大学の改組・転換などが喫緊の課題となっている。

そこで、このような本学を取り巻く社会環境の変化に対応して本学が将来にわたって持続的に発展を遂げるために、建学の精神を体現しつつ、理事会が提唱する基本方針「選手強化」「国際化」「ワンファミリ化」を踏まえて、効果的な事業計画の具体的な基本方針を以下において策定するものである。

### ② 事業計画の具体的基本方針

**(a) 適切な学生数を確保する。**

- (イ) 入試方法の多様化を図り、安定した学生の数と質を確保する。
- ・ 全国的な規模での学生の確保
- ・ 運動能力はもとより、学力の高い学生の確保
- ・ より一層の女子学生の確保
- (ロ) 転・退学生の防止
- ・ 現状の分析
- ・ 防止策の検討と策定

**(b) 児童スポーツ教育学部の円滑な運営を図る。**

- (イ) (設置計画履行状況等調査(A・C・アフターケア)についてA・C調査対応プロジェクトを設置して対応する。
- (ロ) 学生の教学上の充実を図る。
- (ハ) 教育実習・保育実習のための施設を確保する。
- (ニ) 入試の改善を図るとともに、募集活動を強化する。
- (ホ) 女子短期大学の募集停止と将来の廃止に関する情報を学生、保護者及び卒業生に対して周知徹底を図る。

**(c) 新学部開設検討委員会への協力体制を図る。**

- (イ) 新学部開設検討委員会の検討結果に対する検証及び協力をする。

**(d) 「学士力」、「就業力」の向上を図る。**

- (イ) 「学士力」と「就業力」の向上を意図した2013年カリキュラム(平成25年度体育学部新入生から適用)の円滑な運用を図る。
- (ロ) 就職率向上を図る。
- ・ 企業就職率の向上
- ・ 教員志望者のレベルアップ
- (ハ) FD及びSDに積極的に取り組むなど教育内容及び教育環境の充実を図る。
- ・ FDの推進のために、公募型授業イノベーション支援プログラムを立ち上げ、実施する。
- ・ 授業評価に関連して新学務システムを活用・実施し、結果の検証を行う。

**(e) スポーツ競技力の向上(選手強化)を図る。**

- (イ) 理事会との連携の下で、大学の政策として重点種目及び強化選手に関する基本方針を明確に提示する。
- (ロ) 奨学生制度の効果的な運用を図る。
- (ハ) スポーツ局の運用の改善を図る。
- ・ 指導者(専門職のコーチ、トレーナー)の適切な配置
- ・ 強化費の配分
- ・ 運営組織の改善
- (ニ) マルチサポート体制を構築する。

**(f) 教育・研究活動の一層の推進を図る。**

- (イ) 研究室体制の再編成と機能化の推進(児童スポーツ教育学部の開設に伴い学部間の教育と研究の円滑な推進を図るために、研究室のグループ化を促進する。
- ・ 学際研究の推進
- ・ 授業担当コマの平等化(専任教員による教育の充実)
- (ロ) 研究施設・設備の二元管理の推進(管理運営の円滑化) 効果的な研究活動を推進するために、円滑な管理・運営を図る。
- (ハ) 研究組織の連携(総合スポーツ学推進センターを軸に研究組織(大学院、体育研究所、トレーニングセンター)の連携を図る。
- (ニ) 研究助成と研究成果の公表

**(g) 学生の学習・生活のより一層の支援と環境の整備を教職協働により図る。**

- (イ) 学生支援センターの充実を図る。
- (ロ) 学生食堂を中心とした食育を推進する。
- (ハ) インターシップを促進させる。(学外教育活動への協力を含む。)
- (ニ) 女子学生寮及びゲストハウスの建設と男子学生寮の改修を図る。
- (ホ) 健康管理対策のより一層の充実を図る。
- ・ 健康管理センターを充実する。
- ・ 「スポーツクリニック」の開設と活用に関して検討する。
- (ハ) 世田谷・健志台間バスの運行を策定する。

**(h) スポーツに係る国際交流の推進を図る。**

- (イ) 諸外国の体育系大学との連携を図る。
- (ロ) 本学独自のスポーツ交流を推進する。(開発途上国へ学生及び卒業生を派遣する。)
- (ハ) 青年海外協力隊に学生及び卒業生を派遣する。

**(i) 社会との連携をより一層充実させる。**

- (イ) 本学独自の総合型地域スポーツクラブの開設に向けて検討する。
- ・ スポーツ教室を開設し地域との連携を深める。
- ・ 全国のスポーツクラブとの連携を図る。
- (ロ) 学生のスポーツ指導者の派遣依頼に積極的に対応する。
- (ハ) 教育研究情報の公開を促進する。

**(j) 併設校、保護者会及び同窓会とのより一層の連携を図る。**

- (イ) 併設校との施設の共有化を促進する。
- (ロ) 併設校へ教職員・学生を派遣する。
- (ハ) 併設校の生徒の受け入れを促進するための方策を講ずる。
- (ニ) 大学の保護者会及び同窓会との密接な連携を図る。(校友会構想)

**(k) 効果的な広報活動の展開を図る。**

- (イ) 自己点検・評価のエビデンス集(データ)を編成する。

**(l) 自己点検・評価を実施する。**

- (イ) 自己点検・評価のエビデンス集(データ)を編成する。

**(m) 効果的な広報活動の展開を図る。**

- (イ) 自己点検・評価のエビデンス集(データ)を編成する。

**(n) 自己点検・評価を実施する。**

- (イ) 自己点検・評価のエビデンス集(データ)を編成する。

**(o) 自己点検・評価を実施する。**

- (イ) 自己点検・評価のエビデンス集(データ)を編成する。

**(p) 自己点検・評価を実施する。**

- (イ) 自己点検・評価のエビデンス集(データ)を編成する。

外部資金獲得を奨励し、研究助成に基づく研究の公表を義務付ける。

- (ホ) 学生の情操教育のためにキャンパス全体の博物館化を推進する。
- ・ 博物館の収集と展示を推進する。
- ・ 資料の整理と保管のための環境を整備する。

# Challenge

## 挑戦とは妥協しないこと。

第89回箱根駅伝において30年ぶりの総合優勝を果たした陸上競技部駅伝ブロック。全日本学生選手権2年連続2位の実績を弾みに優勝をめざすバレーボール部女子。監督、選手たちにそのチャレンジの軌跡と新たな目標を語ってもらった。挑戦者たちに共通するのは、妥協を許さない厳しさ。これを読む日体生一人ひとりにも、フィールドは違ってもそれぞれのチャレンジがあるはずだ。両部の活躍が導火線となり、日体大というスタジアムで熱きチャレンジが繰り広げられることを望む。



## 指導者と選手たちの本気がぶつかりあった勝利。

昨年選手たちの涙があった。そして悔しさを跳ね返し、今大会見事総合優勝を勝ち取った。襷にかけた思いとそれをどう次につなげるか、監督と選手に話を聞いた。

優勝おめでとございます。

今大会を振り返ってひと言お願いします。

他校になんらかのアクシデントが発生するなか、ウチだけは何事もなく想定どおり走りぬいた結果、気づいたらトップに立っていたというのが率直な感想です。レース前は、さすがに優勝は厳しいだろうけれど、3位はありえないわけではなく、5・6番手なら十分ねらえるだろうという感覚でした。優勝したときの気持ちは、うれしいのは当然として、今振り返ると気持ちのいいものだったな、と。日本橋を運営管理車が選手に先行して通過するときに、人がたくさん集まって、さながらパレードのようになっていましたから。その中心にいるというのは、本当に気分がいいものでした。また今年は、日体大の白い幟が例年になく目立ったという印象が強く、大いに励みになりました。感謝しています。

前大会の総括とチームの再起に向けてつた

方策とはどんなものだったのでしょうか。

私が甘かったことは否めません。選手たちには、「このままではまずいぞ!」とハッパをかけていたのですが、私自身の心のなかに、「それでもなんとかなるだろう」という甘さがあったので、選手

別府 健至 (べつぷ けんじ)

陸上競技部 長距離・駅伝ブロック 監督、本学体育学部卒、本学大学院博士前期課程修了、現在本学准教授、1999年度より同部長距離・駅伝ブロック監督。

に危機感が伝わりきらなかった。ですからまず、私自身が本気であることを選手に見せる必要があったのです。そこで最初に、レース終了直後に、選手全員に「今年のキャプテンは服部でいく。従えない4年生は辞めてくれ」と伝えました。例年、主将は4年生が務めるものであり、主将の指名は大会翌日のミーティングのときに、異例のことばかりだったので、そうすることで私の覚悟を伝えたかったのです。そのあとも、折に触れて、「私の方針に従えない選手は辞めてくれ」という言い方はしましたね。そうして選手に本気で取り組むことを求め続けました。もちろん、方針を決める際は、主務、主将やスタッフ陣などには事前に意見を求めました。スタッフに異論がなければ、問題はないだろうという考え方です。あえてプレッシャーをかけることで、選手の緊張感を維持しようと思いました。実際、辞める選手は一人も出ませんでした。

具体的に練習法が変わった点などはあったのでしょうか。

練習を変える必要性はまったく感じていませんでした。朝に2時間ほど、夕方16時20分から2〜3時間程度という練習時間も、



■第89回 東京箱根間往復大学駅伝競走

	順位	記録
総合成績	1位	11時間13分26秒
往路成績	1位	5時間40分15秒
復路成績	2位	5時間33分11秒

■第88回大会以降のおもな戦績

大会名	実施日	順位	記録
第88回箱根駅伝	平成24年1月2・3日	19位(総合)	11時間22分26秒
第89回箱根駅伝予選会	平成24年10月20日	1位(予選通過)	10時間4分47秒
第44回全日本大学駅伝	平成24年11月4日	4位(シード権獲得)	5時間15分21秒

■第40回 世界クロスカントリー選手権大会(ビドゴシチ、ポーランド)2013.3.24

日本代表 山中秀仁(2年) 矢野圭吾(4年) 本田 匠(4年)

量的に増やすということもなかったです。練習メニューに新たに取  
り入れたものはありました。ベース・コントロールという、体幹  
トレーニングの一種です。身体の軸のブレをなくし故障を防ぐ効  
果が期待できます。ただ最も注意したのは、準備運動や補強運動  
ウォーミングアップのドリルメニューを、きっちりやりきることで  
す。いずれもついつい流してしまいがちなことで、そこから本気に  
なることを要求しました。以上の体幹トレーニングや日常の練習  
から真剣になることの相乗効果で、選手に自覚が芽生えたことは  
大きかったと思います。秋以降は重度の故障者は出ませんでした。

選手的生活面に変化があったと聞いていますか。

生活面では、21時30分の点呼、22時30分の消灯を厳守。また、  
試合の後やオフの前日などは夜遅くまで起きていたこともあった  
のですが、徐々に選手が自制するようになりました。このような  
生活面の変化も勝つためには欠かせないということです。また、  
私の出身校の兵庫県立西脇工業高校で、長年監督を務めになつ  
た渡辺公二先生に、アドバイザーとしてチームに加わっていただ  
き、助かりました。ときに私にとって耳の痛い意見をくださって、  
監督である私のお目付け役となっていたのでした。

ここまで述べていたいただいた変化に対し、選手たちの反応はいかがでしたか。

最初はなかなか本気になりきれませんでしたね。それが、3月  
の学生ハーフ、5月の関東インカレ、6月の全日本学生駅伝予選  
会などで、少しずつ結果がでてくるなか、選手も手応えを感じ、  
自発的に意識を高めていくようになりました。たとえば大会では、  
「20kmを63分台の選手3人以上、64分台の選手を3人以上」  
などと目標を定めて、箱根本番まで詰めていくのですが、「どう  
せ63分台には、あの3人が入るだろう」などと、人まかせにして、  
そこに食い込もうとする選手が少なかったのですが、徐々に変わっ  
ていきました。

練習や試合を通じて困難にチャレンジしたエピソードなどはありますか。

8月の夏合宿でしょうか。3年生は主将の服部に引つ張られる  
形で順調だったのですが、4年生が本気になりきれない。そんな  
夏合宿の直前の時期に、服部をはじめとする3年生の主力3人

が故障で離脱することになったのです。そこで4年生の意識に火  
がついてリーダーシップを発揮することとなり、チーム全体のム  
ドが上昇していきました。3年生の主力3人の故障も箱根本番に  
は間に合う程度で、言い方はおかしいですが、あのタイミングで  
故障が発生したのが、優勝の一因と考えてもいいでしょう。

大会直前の選手の様子をお聞かせください。

12月20日以降、いわゆる「箱根体制」をとり、箱根に登録する  
選手は駅伝合宿所、そうでない選手は健志台合宿寮で合宿をし、  
例年は別に練習を行うのですが、今年は合同練習をすることにし  
ました。故障者に対しても、「駅伝当日までに少しでも走れるよう  
にしておいてくれ」と伝えました。結局、新年1月1日の朝練習  
にはほぼ全員が合流し、チームの士気は高まったと思います。

日体大駅伝の伝統や強みとは？

プライドですね。「チームワークで襷をつなぐ」とか、「根性の  
ある泥臭い走り」といったチームとしての伝統的なスタイルは特に  
意識していません。それよりも、選手個々が、日本最大級の体育  
大学の駅伝部であるという誇りをもって走り抜くということです。

最後に、今後の目標や抱負をお願いします。

大会二連覇ということはもちろんあるのですが、それはメデ  
アなど周囲が盛り上げてくれるだろうから、あまり強く選手には  
言っていません。それよりも、やはり準備運動や日々の生活を本  
気になって詰めていく部分を100%にまで追求していきたいで  
す。昨年中も、結果が出たとはいえ選手全員が完全にやりきれて  
いたわけではありませんから。

今は、箱根制覇で意識が高まった選手、自信がついた選手、実  
力的に劣つてもトップに割って入ろうという意欲を見せる選手など  
が出てきました。一方でそうならない選手がいるなど温度差が  
あります。全体の底上げを図らないと苦戦は必至で、3月が一つ  
の勝負の月に。来年の箱根に向けた戦いは、もうはじまっている  
のです。



箱根



—今大会を振り返って

皆さん、本当に応援ありがとうございました。レース当日は風が強く厳しい環境でしたが、伊豆大島の合宿で強風の中で練習した経験もありましたので不安はありませんでした。襷を受け取った時は、正直追いつけるかわかりませんでしたが、強気に攻める気持ちを忘れなかったのが勝つことができました。

—主将に指名された時の感想は？

当初は戸惑い自分に務まるのかわかりませんでした。しかし、チームを立て直すためには“やるしかない”と思っていました。19位から今回優勝することができましたが、今後も慢心することなく精進してまいります。引き続き、ご支援、ご協力、そして温かいご声援を頂きますようお願い申し上げます。

主将 5区  
服部 翔大  
(体育学科4年)



—この1年間での

あなた自身のチャレンジは？

すべてが挑戦でした。しかし、私自身というより「全員駅伝」ができたことが、優勝につながったと思っています。故障している選手もなんとか箱根駅伝当日までに少しでも走れるようになり、良い雰囲気でも当日を迎えることができました。繰り返しますが、個人での成績より、チームで勝ち取った優勝が何よりうれしいです！

—今後の抱負、目標は？

自分たち一人ひとりが一つひとつの目標をしっかりとこなすためにも、生活からしっかりと気を引き締めこれからの大会に備えていきたいです。個人としては、トラックシーズンでは世界選手権に出たいです。もちろん箱根駅伝をはじめ三大駅伝では個人・チームとして今年以上の結果を残していきたいと思います。

# 次大会で、さらなる挑戦を続けます。



6区

鈴木 悠介  
(体育学科4年)

優勝メンバーとはなったものまだまだ納得がいく走りとは言えなかった。今回は6区で区間新を出し「山下りの神」と呼ばれる選手になりたい。



4区

木村 勇貴  
(体育学科3年)

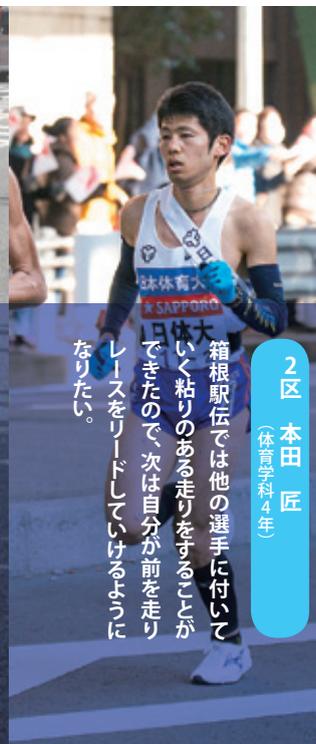
初めて箱根の大舞台を走って多くの方々が支えてくれていたことを実感。今年は感謝の気持ちを持って練習に取り組み結果を出し恩返ししたい。



3区

山中 秀仁  
(体育学科2年)

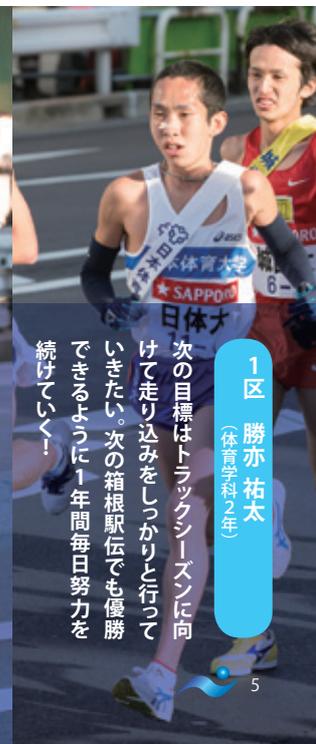
個人としてはトラックでの自己記録更新をめざして全力で努力していく。チームでの目標はもちろん箱根駅伝二連覇。持てる力を出し切りたい。



2区

本田 匠  
(体育学科4年)

箱根駅伝では他の選手に付いていく粘りのある走りをするのができたので、次は自分が前を走りレースをリードしていけるようになりたい。



1区

勝亦 祐太  
(体育学科2年)

次の目標はトラックシーズンに向けて走り込みをしっかりと言っていた。次の箱根駅伝でも優勝できるように1年間毎日努力を続けていく！

# Challenge

## —主務から見た1年間のチームの変化は？

チームが変わったのは箱根予選会でチーム目標をクリア出来たことで、これが自信に繋がっていきました。そして、自分が主役だと一人一人に言い聞かせて個々で頑張ることを尊重したことで次第にチーム力が上がっていきました。

## —箱根駅伝試合中の感想は？

88・89回箱根駅伝では当日選手の後ろを走っている運営管理車に乗車していました。前回19位になった時は後ろに他大学が居なく箱根駅伝の終了を知らせるアナウンスと、応援というより罵声飛び交いながら大手町へ向かって走っていました。今回、優勝したときには応援の音が鳴り止まなく、沿道で沢山の日体大の「のぼり旗」を見うけられ誇らしげに持って応援していただける姿を見て「ここまでやってきて良かった」と思いました。

中村 大樹 主務  
(平成25年3月体育学科卒)

## —今大会を振り返って

優勝を振り返って沢山の方から喜びの声やメール・電話をいただきました。自分たちが優勝したことの大きさを感じております。今回の優勝の勝因はチームが一つになれたことです。全部員箱根がゴールするまでやるべきことがわかっていて使命感をもって挑めました。

## —この1年間での

### あなた自身のチャレンジは？

「箱根で笑顔になる為に」この言葉と共に自分はスタッフや選手として自分自身に言い聞かせて厳しいことを言ったり、嫌われるような言葉も言ったりしました。これが自分自身のチャレンジだったと思います。本音の部分では部員皆と仲良くなりたい、楽しい学生生活を送りたいと思いましたが…。



# たくさんの応援に感謝。トラックで、



区間	選手	区間順位	記録
1区	勝亦 祐太	7位	1時04分07秒
2区	本田 匠	4位	1時10分47秒
3区	山中 秀仁	6位	1時06分30秒
4区	木村 勇貴	5位	58分16秒
5区	服部 翔大	1位	1時20分35秒
6区	鈴木 悠介	7位	59分33秒
7区	高田 翔二	2位	1時04分53秒
8区	高柳 祐也	2位	1時07分03秒
9区	矢野 圭吾	2位	1時10分26秒
10区	谷永 雄一	2位	1時11分16秒

今回の箱根駅伝で学んだのは「できないことはない」ということ。これから指導者になるうえで、この気持ちだけは忘れないように頑張りたい。

10区 谷永 雄一  
(平成25年3月体育学科卒)



昨年度の結果をもとに、日本選手権などでさらにレベルアップして記録をねらいたい。連覇につながる結果を出しチームに必要な選手になりたい。

9区 矢野 圭吾  
(体育学科4年)



今までお世話になった方々に結果で恩返しすることができて本当によかった。これからは指導者として世界で戦える選手を育てていくのが目標。

8区 高柳 祐也  
(平成25年3月体育学科卒)



最後の箱根駅伝で優勝に貢献でき、大きな誇りと自信になった。社会人ではマラソンで人に感動や勇気を与えることができるランナーになりたい。

7区 高田 翔二  
(平成25年3月体育学科卒)

# Challenge



根本 研 (ねもと けん)

バレーボール部(女子)監督、本学体育学部卒、本学大学院博士後期課程満期退学、現在本学准教授、2002年度より同部(女子)監督。

## 変化と進化を続けるチームへ。可変する指導者の挑戦。

昨年度、惜しくも2年連続インカレ2位という結果となったバレーボール部女子。チームが一体となって、優勝に向けた新たなチャレンジが始まっている。

### まず2012年度を総括してください。

最大の目標であったインカレで惜しくも優勝こそ逃しましたが、2年連続の決勝進出を果たせたこと。また、個性的な4年生たちが一つの戦う集団に成長を遂げたことなど、収穫の多い一年でした。点数を付けることは難しいですが、90点以上の採点になると思います。もちろんインカレで優勝出来なかった悔しさはあります。ですが、どの試合にも最高の準備をして臨む。そのような過程の「旅」は最高のものでした。学生にも同様のことを最後の試合の後に伝えました。

### 個性的な選手が多かったということですが、苦勞もあつたと思います。

インカレ前には4年生同士が練習中に激しく意見をぶつけ合うときもありました。見方によってはチームが壊れてしまう危機かもしれません。その学生たちはチームを良くしたいという気持ちからぶつかり合っていたのです。そのような状況の中で、私が方向性を押しつけるのは逆効果になります。ですから私は、ただ本当に見守るだけでした。もちろん場合によっては、選手と徹底的に対話することも必要ですが、18歳から22歳の大学生活において選手たちは技術だけではなく、精神的にも大人になる時期です。そこで自分の型にはめるような指導は、時としてマイナスに作用することもあります。ですから、私の立場としては「積極的に見守る」ことが大事な役割だったと思います。

### 先生が感じたチームの成長とはどのようなあたりでしょうか。

私が「勝つんだ」と傲を飛ばしても、選手たちが「勝ちたい」と思うことがなければ、そのチームは強くなりません。1年間の日々の経験の中で、選手たちは勝利を欲する気持ちが

強くなっていきました。技術的な指導はもちろんですが、選手たちの前を向いた気持ちやチーム内の強いベクトルとなつて、インカレを迎えることが出来たと思います。

### 学生たちの持つ成長力に驚かされることも多いのではないのでしょうか？

自分たちの学生の頃もそうですが、「学生スポーツは青春」なんですよ。青臭い表現ですけど(笑)、この言葉がピッタリだと思います。社会人になってからは出すことの出来ない、内に秘めたとつともないパワーを持つているのがこの時期です。指導者はそのパワーを引き出すこと、格好いい表現で言えば「その気にさせる」ストーリーを作ることが仕事なのです。

### 伝統ある女子バレー部を指導するという一方で、プレッシャーを感じることもないかと思いませんか？

監督に就任した11年前はそれがとにかくありました。過去に一度も関東一部リーグから降格したことがないのは、ウチだけです。かつて入れ替え戦での戦いを余儀なくされた際にはプレッシャーも、伝統の重みも感じました。ですが、その伝統に縛られることで、選手たちが本来の力をコートで出せないのであれば、その伝統は意味の無いものになってしまいます。私は「日体魂」という言葉と、校章のマークが大好きなのですが、常にその時代に即した日体大の姿というものを追い続けることが伝統、歴史を、より輝かしいものに変えていけると思っています。学生たちにも、歴史あるチームでのプレーということと重みを感じながらも、自分たちで未来のあるべきチームを創りあげていくという気持ちを持つてもらいたいですね。

### 2013年度のチームの目標をお聞かせください。

もちろんインカレで優勝すること、そこをターゲットにすることは間違いないです。個性的な選手が多かった前年度に比べると、今年は「積み上げ型」のチームです。その積み上げを続ける中で、昨年度同様に勝ちたい気持ちも強く出るような集団に変化して行ければ良いと思っています。

### 先生自身の今後のチャレンジについてはいかがでしょうか。

他大学の指導者の方とも話す機会がある中で、日本の女子バレーボール界は大学を経て日本代表チームに入る選手が少なくなつてきています。まずはトップアスリートを育てるといふ観点では日本を代表するような選手を輩出したいですね。もちろん、それだけではなくバレーボールを競技としては大学で最後にする学生たちも多くいます。しかし、そこで完全燃焼してしまうのではなく、生涯スポーツとしてバレーボールの楽しさ、仲間との時間を持つ素晴らしさを教えていきたいですね。日体のバレーボール部で育った学生たちが全国、いや世界中でバレーボールを広めてくれたらと思います。そして私自身は常に可変できる存在でありたいと思っています。常に目の前のことに全力を尽くす中で、変化と進化を続けていきたいです。学生スポーツの姿も、自分が学生であった頃と比べると大きく変化しています。指導法も学生の氣質も、ですが、変わらない「熱い」ものもあります。その変わっていくもの、変わらないものを融合させていくことが私のチャレンジではないかと思っています。



**－昨年度を振り返って**

リーグ戦、インカレとあと一步で優勝まで届かなかった悔しい一年でした。上位争いを出る力があるということを証明できた反面、勝ちきれない面があったのは、今年への改善点だと思います。昨年はサブマネージャーとして、多くの勉強をさせていただきました。その中で私個人としては常に4年生が最高のパフォーマンスを発揮できるように、下級生全体のまとまりを意識していました。

**－インカレについては**

夏の合宿では一度も勝てなかった中京大学戦(4回戦)がもっとも印象に残っています。夏合宿では一度も勝てなかった相手に勝てたということは、夏からのチームの成長を示せたと思います。決勝の嘉悦大学戦は良いところも悪いところも全て出た試合だったように感じています。

**－主務としてのやりがいは**

チームが勝ったとき、これに尽きます。それまでの苦勞を共有した選手たちがコートで活躍する姿は主務としても最高の瞬間です。

**－今年のチャレンジは**

主務は部にとって母親の存在です。時に叱咤し、時には相談相手になり、時には息を抜ける存在である。今年は立派な「母親」が務められればいいなと思っています。

辰巳 亜謙 主務  
(体育学科4年)

丸山 紗季 主将  
(体育学科4年)



**－昨年度を振り返って**

昨年度のチームは周囲からインカレ優勝候補に挙げられることもあり、プレッシャーもありましたが、強いまとまりを感じられるチームでした。2年連続インカレ2位という結果に関しては、悔しい思いが強く必ず優勝したいという気持ちが強くなりました。

**－昨年度のチャレンジについて**

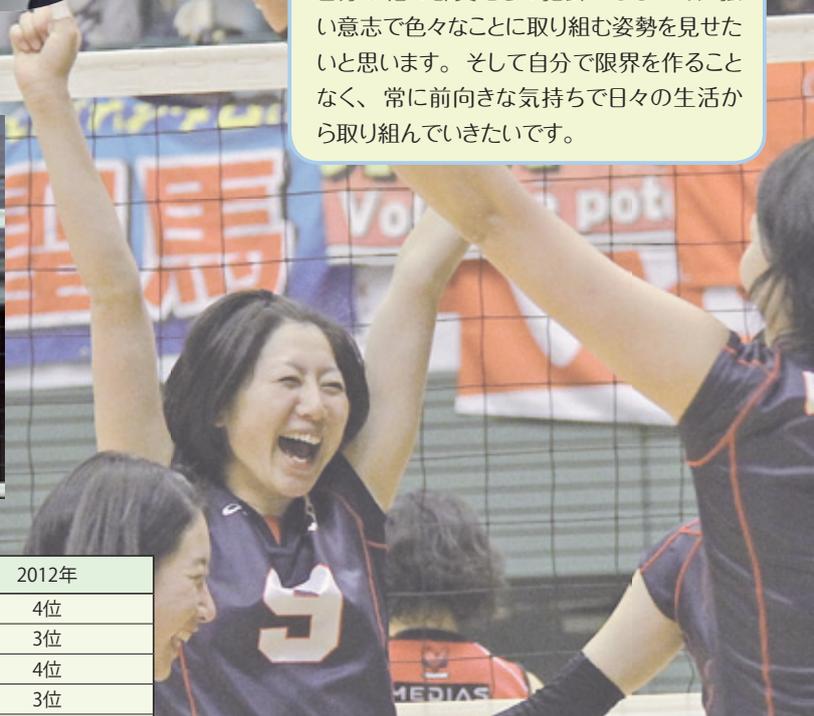
4年生だけでなく下級生も含め、チーム全体へ気を配ること。また視野を広げ主体性を持って練習に取り組めたことなどが良かったと思います。勝ちたい気持ちを他の選手と共有することで、チームの一体感を感じることも出来ました。

**－新年度からは主将という立場ですが**

まずは部員全員を理解するために、これまで以上にコミュニケーションを大事にしていきたいです。ひとり一人に合った接し方をすることで、それぞれが持つ力を引き出せればと思います。

**－丸山さん自身のチャレンジは**

自分が他の部員たちの指針になるべく、強い意志で色々なことに取り組む姿勢を見せたいと思います。そして自分で限界を作ることなく、常に前向きな気持ちで日々の生活から取り組んでいきたいです。



**バレーボール部(女子)戦績**

	2010年	2011年	2012年
春季リーグ戦	4位	—	4位
東日本インカレ	3位	3位	3位
東西インカレ	4位	4位	4位
秋季リーグ戦	3位	6位	3位
全日本インカレ	3位	2位	2位
全日本選手権大会(天皇・皇后杯)	関東ブロック敗退	決勝ファイナルラウンド ベスト16	決勝ファイナルラウンド ベスト16

**<個人賞>**

- 2010年 春季リーグ戦 ベストスコアラー賞、サーブ最優秀賞/中村 亜友美(2年)
- 2010年 東日本インカレ スパイク賞/岸本 瞳(3年) サーブ賞/和才 奈々美(1年)
- 2010年 東西インカレ サーブ賞/和才 奈々美(1年)
- 2010年 全日本インカレ ブロック賞/星 はるか(2年)
- 2011年 東日本インカレ サーブ賞/高橋 舞(2年)
- 2011年 秋季リーグ戦 サーブ賞/中村 亜友美(3年)
- 2011年 全日本インカレ 敢闘選手賞/岸本 瞳(4年) サーブ賞/中村 亜友美(3年)
- 2012年 リベロ賞/小幡 真子(1年)
- 2012年 東西インカレ サーブ賞/丸山 紗季(3年)
- 2012年 秋季リーグ戦 ベストスコアラー賞/中村 亜友美(4年)
- 2012年 全日本インカレ サーブ賞、敢闘選手賞/中村 亜友美(4年) レシーブ賞/星 はるか(4年)

※学年は大会開催時のもの





# 新しい時代の コーチングを探究する

< 体育科学研究科 博士前期課程 体育実践学コース コーチング学系 >

新しい時代のコーチングとは、指導者が人間性を発揮しながら選手や学生・生徒とかかわり、自発的に能力向上や人格形成を図ることであるという。さらに、そうした若者を育てることで社会や未来にも好影響を与えることができる。大きな広がりを持つコーチング学の世界について、伊藤雅充准教授、矢野晴之介サッカー部(女子)監督に語ってもらった。

## 体育科学を リードする

～大学院研究科の取り組み～

1



### PROFILE

#### 矢野晴之介

サッカー部(女子)監督

日本体育大学大学院・筑波大学大学院修了。ドイツスポーツ大学ケルン留学。現在本学助教。2008年から同部監督。2011年度、2012年度全日本大学女子サッカー選手権大会優勝。

とも人間性を重視しているんです。当然スポーツですから勝つことは大切なんです。が、それぞれ寮があったり、学校を併設していたり、まず教育に力を入れています。人間として成長させていくことを第一にして、それにスポーツをどうからめていくか。スポーツがその人の人生にとってマイナスになつてはいけないんだということをおっしゃって

### 学び続けること

伊藤…国内海外を問わずいろいろな指導者や

伊藤…大学院(体育科学研究科・体育実践学コース)「コーチング学系」は2011年4月にスタートし、この3月に第一期生が修了しました。日本はもとより世界的に見ても先例のない大学院を作ろうとチャレンジを続けています。私たちは積極的にフィールドに出て実際のコーチング場面でのデータを集めたり、コーチたちのインタビューなどを通して、優れたコーチは何が違うのか、どのような過程で養成されていくのかなどを研究し、教育過程に落とし込み、その育成に活かしていきたいと試みてきました。その意味で、現場のコーチの方々と共に歩んでいくというスタンスを重視しています。昨年は矢野先生とロンドン五輪、スペインのFCバルセロナとサンチェス・カサルテニスアカデミーを視察しましたね。

### コーチに問われる人間性

伊藤…FCバルセロナもサンチェス・カサルも、

伊藤…現場の話をするとう学生の食い付きが違いますね。スポーツ科学やコーチングの話をする時に、アスリートが本気で戦っている現場を見ていないとその雰囲気は伝わらないじゃないですか。特に日体大というトップレベルの環境の中でそういう話ができるのが非常に楽しみです。それでコーチングを研究してみたいという学生が出てきてもいいし、いいコーチになるために勉強したいという学生が出てきてもいいし、そういう複数の方向性を視野に入れ今後もこの学系を展開していきたいと思っています。

伊藤…先日も女子サッカーのインカレ決勝戦を観戦させてもらいましたが、いいチームじゃないですか。本当に楽しそうにプレーしています。矢野先生のキャラクターが乗り移っている感じがですね。スポーツにおいて指導者やリーダー、監督の影響はものすごく大きいです。確かに練習メニューを豊富に持っているとかそういうことはあるでしょうけれど、その人がどういう人なのかということにかなり左右されるとあらためて思います。

### スポーツの現場が研究室



### PROFILE

#### 伊藤 雅充

准教授

アジアコーチング科学協会理事、日本コーチング学会理事ほかを務める。専門は「コーチング学」。大学院コーチング学系において「日体大モデルのコーチ実践指導力向上に関する研究」に取り組む。

体のOGがピッチに立っているわけですね。今の学生をどう指導すればいいか、あるいは一般学生に対してスポーツの素晴らしさをどう伝えるか、本物を見たと説得力が全然違います。スペインでは、世界最高峰のサッカーに触れ、練習場の雰囲気、選手の表情、コーチのパッションを肌で感じる事ができました。実際にお会いすると、指導者とはどうあるべきか、サッカーを愛する者としてどうあるべきか、何が格好いいか、そういった空気を自然と吸収できるんです。非常に納得のいく経験ができたと思っています。

たのが印象的でした。それで勝っちゃいますからね。矢野…そうですね。私が面白いと感じたのは、人間教育という道徳とか倫理観とかそういう話を考えがちですが、彼らは違うんです。指導者がまず人間としてどうあるべきか、問われるべきかというのを考える。単に方法論を教えるのではなく、選手への問いかけであったり、話し方であったり、サッカーやテニスを教える中で人間性を養っていくわけです。子どもたちが自分をより深く知って、より社会に適応していく。コミュニケーション能力を高めていく。教育的なコンセプトが包括的にコーチングに含まれていることが新鮮でした。お話しを伺った方々は本当に魅力的で、彼らに教えてもらうことは人生を教えてもらうことであると、そんなオーラを感じました。



コーチング学の研究者を話を聞いてみると、やはり共通点があります。妥協しない、自己研鑽を続けているのです。自分が止まっている人はいないです。そういうことをやっていけば休みの問題も起きないと思うんですね。コーチングの一つに問いかけてテクニクがありますね、それによって本人が一生懸命に考えるわけです。コーチが選手を自分の枠にはめようとしてはいけない。そういう作業になっていくと、いくら情熱があっても別の方向に進んでしまう可能性があります。ロンドン五輪でグローバルコーチハウスを訪れた際にも、アスリートをコーチの限界の犠牲者にしてはいけないと、トップコーチのひとりが話していました。

**矢野**..特に15歳から18歳というのは強化というより育成の段階でしょう。バルセロナでは育成ということをしつかりやっています、社会もその点を評価しています。日本の中学校や高校の先生の評価はどう教えるかではなくて、やはり記録を残したかです。そういった社会的背景も大きく関係していると思います。

選手の育成をしているか、どういうコンセプトで何を大切にしているかなどについてインタビューしてきました。そうすると、優れたコーチと言われる人たちは、結果を出している人たちは人間的な温かみを持っているというか、月並みな表現ですが人柄の良さを感じる人が多いですね。結局は情熱をどういうふうに使おうかということだと思えます。学び続けること、あるいは社会や家族に対して責任を果たすこと、人間性を磨くことに情熱を傾けてほしいですね。

## スポーツを楽しむということ

**矢野**..体罰の話もそうですが、スポーツは本来は楽しいものなんです。その延長線上に競技スポーツがあるわけですが、どんな種目でもPlay「遊ぶ」という要素があるはずなんです。これを日本に本当に理解させるのはなかなか難しいですが..

**伊藤**..バルセロナで聞いた話が面白かったですよね。ボールを持つて攻撃するから楽しいんですよ。ボールを奪われたら楽しくないから早くボールを捕っちゃえと。トップチームも含めて、全部こういう考え方なんです。とにかく楽しむんだよ。

**矢野**..本場にそうすね。  
**伊藤**..プレーヤーを「選手」と訳すと、楽しむという要素は感じられない。「競技者」も違う。プレーヤーはプレーヤーなんです。競技スポーツは競うという面をとらえるより、「ハイパフォーマンススポーツ」と呼ぶほうが英語ではしっくりきます。自分の競技レベルを上げてもっともつてきたらまた違ったスポーツの楽しみが増えるでしょ。パフォーマンスを上げるといことは、相手とではなくて自分との戦いなんだよ、という文脈で語られているわけです。日本もスポーツを通して、世の中をどういうふうにしていきたいのか、社会の意識を変えていきたいのかということを実際に考えなければいけない時期にきていると思います。

**矢野**..本で読んだ話ですが、無農薬で本当に野生のいきいきとしたリンゴを作っている人がどうしているかという、環境を整えることだけに気を配っているというんですね。土をつくり、そし

てリンゴに毎日話しかけるといふ。人間も同じだと思えます。こういうリンゴがなるための環境をどう作るか。学生たち、プレーヤーが楽しみながらもハイパフォーマンスの域に達していく。どれだけ自己と対峙する機会を増やしていく、なおかつ自分を見つかることも一つでも一つでもレベルを上げることが出来る。そういうステージを設けることが、私たちコーチ、指導者のこれらの仕事ではないでしょうか。

## 私たちがなすべきこと

**伊藤**..そう考えると身が引き締まる思いがしますね。つまり、私たちがどう振る舞うかということ、学ぶ学生たちのコーチングに影響してくる。さらに彼らが世に出て、何千人、何万人の子どもたちに影響を与える可能性がある。もっと言えば、スポーツを、社会を変えていくのはコーチの責任だとさえ思っているわけです。はじめにコーチには学び続ける姿勢が大切だと話しましたが、言い換えればいろいろなことにはチャレンジしていく、クリエイティブにアタックしていくような姿勢を持つことが求められていると思います。そういう人材を育てることが日々に期待される役割だと思えますし、責任の重さを感じます。

**矢野**..いいクラブがあって、いい学生がいて、いい取り組み姿勢を続けていけば勝ちにつながる。日本一になる。そういうモデルを示すことが私たちに課せられた使命ですね。

**伊藤**..この学系では、理想のコーチングとはど

ういものなのか、自分はどうなりたいのか、世の中をどういうふうにしていきたいのか、理想から哲学観まで徹底的にディスカッションしています。いろいろな人の意見がぶつかり合うのがすごく楽しいし、考え方のオプションが広がるんです。そういうことを模索し続けることが、コーチの責任であり、すなわち学び続けることだと思います。もちろん今の社会に適応する人間を作っていくことが重要な役割ですが、大学という機関ではさらに20年後、30年後を考えて、どういふ人を育てていくか、どういふ社会を作っていくかまで広げて、理想を語り合っていくべきです。多様な哲学観をもって社会にサジェスチョンしていくべきです。常に未来を見据えたカリキュラムを大学院は構築しておく必要があると思っています。

**矢野**..サッカーのオشمが言っています。日本はサッカーもスポーツも非常に可能性のある国であると。南米や東欧はいわば食べるためにサッカーを必死でやっている。一方、日本では純粋に楽しむためにサッカーやスポーツをしている人がたくさんいるわけです。勝利至上主義のサッカーをやるか、優雅にパスをつないで見ていて楽しい華麗なサッカーをやるか。サッカーに限らず、スポーツ全般において日本は後者を追求する可能性が多分にあるのです。

**伊藤**..コーチングを学んでみたいという人は、どんな門を叩いてほしいですね。その先にある世界はすごく大きい。わくわくするじゃないですか。

## column



### 三輪 康廣 教授

大学院 体育科学研究科 博士前期課程 体育実践学コース コーチング学系 主任

本学大学院体育実践学コース・コーチング学系の特徴は、教科名「プラクティカム」に代表される指導現場における実践経験を最も重視している点でしょう。今春3月にはめでたく1期生10名が修了しました。即戦力を有するスーパーコーチャー達が様々なスポーツ場面で活躍してくれることを期待しています。

# デンマークの 幼稚園・保育所事情

幼児教育保育科 准教授 本多 洋実

昨春秋、デンマークに赴き、教育・社会福祉・保育制度について学ぶ機会を得た。以下に簡単に報告したい。

## 1 デンマークの福祉労働者

デンマークでは女性の社会参加が顕著であり、それを支えるものは、子育て支援や家族時間の保障である。当然男性の子育て参加が出来る環境も整えられている。

労働組合活動が盛んであり、保育・教育を含む福祉労働者の権利も他の職種同様に守られており、労働時間や職業病と呼ばれる腰痛・頸肩腕症等の予防（介護機器等の充実）には厳しいルールが作られて

ていた。労働時間の厳守、育児・介護休暇の充実が図られており、日本で働く身には、夢物語のように思える。

## 2 保育期間と国民学校入学時期について

日本の保育士・幼稚園教諭等に該当する専門職は、公務員の「ソシアルベタゴ（生活指導教諭）」である。そして保育制度を補完するものとして「保育ママ」があり、市から給与が支払われる准公務員である。基本的に施設職員と収入は同等である。

デンマークの子育て・教育制度は、0歳から3歳が保育所及び保育ママで、3歳から7歳までが日本の幼稚園に相当するものである。明らかに日本と異



【写真1】園舎外観



【写真2】園庭の一部



【写真3】子どもたちの自転車

なることは、6歳から7歳が幼稚園学級と呼ばれ、義務教育の範疇にあり義務教育の始期として位置づけられている。つまり義務教育は6歳または7歳から始まり、9年間の小中学校一貫教育である。9年後に高等教育へ進む、または就職するという選択があるのは理解しやすいが、必要に応じて10年生も存在する。子ども一人ひとりの状況に合わせた選択が可能である。

我が国では小学校であれ特別支援学校であれ、定められた年齢が来たら、子どもの発達や親の意思に関係なく一律に入学・卒業する制度とは異なる。

## 図書館を 利用しよう

みなさんの周りには、公共図書館とよばれる地元の身近な図書館のほかに、学校・大学の図書館や、専門分野に特化した専門図書館などいろいろな図書館があります。日本体育大学図書館は、大学の図書館でもあり、身近な図書館でもあり、専門図書館でもあります。

### ● 学習・研究をサポート！ ●

大学の図書館としては、みなさんの学習・研究をサポートします。授業に関係する本はもちろん、関連する分野の本もそろえてあります。パソコンや就職関係の本も置いてあります。合わせて100台のパソコンもみなさんの利用を待っています。インターネットや文書作成に利用してください。授業実施期間中は、部活が終わった後も使えるよう夜10時まで開いていますので、DVDの視聴スペースとしても、試験や就職の学習スペースとしても、大いに活用してください。

### ● 読書をサポート！ ●

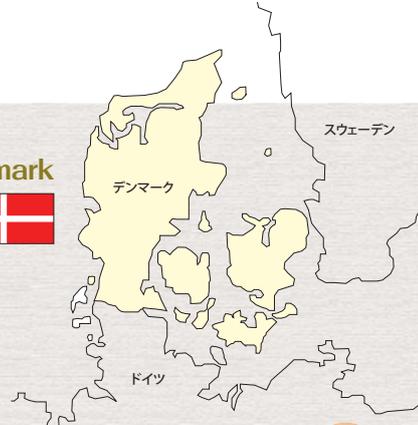
身近な図書館としては、みなさんの読書をサポートします。いろいろな雑誌や小説、スポーツ紙も網羅した新聞など、勉強以外の本もあります。旅行や料理の本、スポーツ映画DVDもあります。なにが分からないことも本を読むとわかることもあります。せっかく浮かんだ疑問です。ネットでおしまい、ではもったいないですよ。普段は本を読まないひとでも、目に入った本を借りて、少し読んでみてください。本を読むひとは、普段は読まないような分野の本を借りてみてください。借りるのに必要なのは、学生証だけですから。

### ● ココを注目！ ●

日本体育大学図書館は国内随一の体育・スポーツ分野の専門図書館でもあります。雑誌のバックナンバーや貴重な古い図書などを所蔵していて、学外利用者からも当てにされる存在です。また体育史家・岸野雄三先生の個人蔵書を寄贈されて設立された「岸野文庫」、長くIOC委員だった猪谷千春氏から寄贈されたオリンピック関連コレクション「猪谷文庫」なども所蔵しています。中村民雄先生から寄贈された武道関係コレクション「民和文庫」も受け入れたばかりです。

図書館にはまた、学内の出会いの場所でもあります。グループ閲覧室は最も人気のあるスペースで、静粛ゾーン閲覧室とはっきり分けた使われ方が特徴です。図書館がどんな雰囲気のところか一度覗いてみてください。覗いたあとは、ぜひ、図書館を利用してください。

## Kingdom of Denmark



### 3 幼稚園見学

以下は、9月18日に見学したオーデンセ市内のBORNE・DORGEN 幼稚園(ANETTE DRUD JEPSEN所長)で取材した内容である【写真1】。

園庭は木立が多く広い。日本の園庭と異なるのは、運動会ができるような運動場ではない。死角をなくし、見通しが効くように作つてある我が国のものとは異なる【写真2】。事務室あるいは教室から園庭が見えるつくりとは言えない。安全管理上の問題はどのようになっているのかが疑問だが、園舎の外園庭では、子どもたちの隠れ場所になりそうな場所がいくつもあり、森の中のような場所もある。園庭内は、子どもたちが自宅から持参した自転車置き場

### 4 まとめとして

今年も北欧の福祉を調査し、我が国のシステムに取り入れられるものは取り入れたいと考える。海外短期研修を許可いただいた大学に感謝申し上げます。

一年を通して0から3歳児は屋外でベビーカーに寝かせられ、2時間の昼寝をする。訪問時は9月の雨天だった。屋外に用意されている車庫のような屋根つきのベビーカー小屋では、虫よけネットに覆われたベビーカーの中で、子どもたちが眠っていた【写真4】。冬期でも摂氏マイナス10℃以下にならない限り、同じように屋外で昼寝するという説明には驚かされた。我が国では虐待とも受け取られかねない。

れてあり、ヘルメットをすれば自由に乗り回せる【写真3】。



【写真4】ベビーカー小屋



# 平成24年度 [下半期クラブの主な大会成績]

学生支援センター 生活支援部門 調べ 12月~2月  
 情報は新聞各紙(日体大スポーツ含む)・インターネットからの抜粋

クラブ名	大会名	性別	種目	順位	氏名
■スケート(スピード部門)	2012/2013ジャパンカップスピードスケート競技会第1戦 2012/2013ジャパンカップスピードスケート競技会第2戦 第32回全日本学生スピードスケート競技選手権大会<総合部門>  第32回全日本学生スピードスケート競技選手権大会<スプリント部門>  第85回日本学生氷上競技選手権大会	男子	1500m	3位	渡部智也(4年)
		女子	3000m	2位	阿部真衣(4年)
		女子	500m	優勝	黒岩美生(2年)
		女子	1500m	優勝	阿部真衣(4年)
		女子	3000m	優勝	阿部真衣(4年)
		女子	5000m	優勝	阿部真衣(4年)
		男子	500m(1日目)	2位	石原大暉(4年)
		女子	500m(1日目)	3位	西端 暉(3年)
		男子	1000m(1日目)	3位	西端 暉(3年)
		男子	1500m	3位	渡部智也(4年)
		男子	5000m	3位	渡部智也(4年)
		男子	10000m	3位	千葉暉太郎(4年)
		女子	500m	優勝	黒岩美生(2年)
		女子	1000m	2位	黒岩美生(2年)
		女子	1500m	2位	阿部真衣(4年)
女子	3000m	優勝	阿部真衣(4年)		
女子	2000mリレー	3位	阿部真衣(4年)		
女子	チームバンブート	2位	阿部真衣(4年)		
女子	女子総合	優勝	阿部真衣(4年)		
■ソフトテニス	第46回総理大臣杯全日本学生選抜ソフトテニスインドア選手権大会 関東学生ソフトテニスインドア選手権大会 ヨネックス林沼田インドアソフトテニス大会 第46回総理大臣杯全日本学生選抜ソフトテニスインドア選手権大会	男子		3位	林田和樹(4年)
		男子		3位	大塚悠平(4年)
		女子		2位	宇治橋 慧(4年)
■トランボリン	川崎市長杯争奪2012国際トランボリンジャンプオープン兼日本社会人選手権大会JOCジュニアオリンピックカップ	男子	ジャンプオープン部門	3位	田崎勝史(4年)
		女子	マスターズ部門(19才~29才の部)	優勝	齊藤結依(3年)
		女子	エベ団体戦	優勝	
■ハンドボール	高松宮記念杯男子第55回・女子第48回 平成24年度全日本学生ハンドボール選手権大会	男子		優勝	
		女子		優勝	
■フェンシング	第65回全日本選手権(団体戦)	女子	エベ団体戦	優勝	
■陸上競技	第89回東京箱根間往復大学駅伝競走			総合優勝	
■レスリング	天皇杯平成24年度全日本レスリング選手権大会		グレコローマンスタイル 5.5kg級	2位	田野倉翔太(4年)
			グレコローマンスタイル 6.6kg級	2位	音泉秀幸(4年)
			フリースタイル 5.5kg級	優勝	森下史崇(4年)
			フリースタイル 6.6kg級	2位	井上貴尋(4年)
			フリースタイル 7.4kg級	3位	山中良一(4年)
			フリースタイル 9.6kg級	2位	佐々木健吾(4年)
■エアロビクス同好会	2012年度一般グループ部門日本代表選手選考会	女子		優勝	上田真穂(4年)
		女子		2位	河野さゆり(4年)
■セバタクロール同好会	第23回全日本セバタクロール選手権大会	男子		3位	本庄彩香(3年)
		女子		2位	樋口文音(4年)
■ダブルダッチサークル	JAPAN OPEN 13EAST ROUND	女子	ダブルス	優勝	チーム名 徳翔魁
■スカッシュ同好会	第40回全日本学生スカッシュ選手権大会	女子		2位	青木 恵(4年)
		女子		3位	江崎あずみ(4年)
■混合バレーボール選手権・B大会	混合バレーボール同好会	女子		優勝	
		女子		優勝	



## NEWS

### TOPICS

## ■平成24年度 地域・社会貢献推進委員会活動実績

実施形態	実施年月日	実施場所	事業名・名称	テーマ・コンセプト	主催・主幹	参加対象者	参加者数
講座	H24 7.28	世田谷キャンパス 教育研究棟大会議室 スポーツ棟中体育館		子どもの「こころ」と「からだ」の健康がコンセプト。今回のテーマは「こどもの元気を育む保育を考える」	日本体育大学女子短期大学部 (幼児教育保育科)	幼児教育、保育に携わる方 保育者養成校学生 本学学生	77
体力測定	H24 11.2-	世田谷キャンパス スポーツ棟中体育館	平成24年度「体力測定」	地域住民の体力向上、健康増進	日本体育大学(運動生理、衛生公衆衛生、健康管理、 発育発達、健康教育、体力測定評価、体育研究所)	日体フェスティバルの企画 として実施。フェスティバル参加者	796
体力測定	H24 11.17-18	健志台キャンパス 第3体育館	平成24年度第1回日本体育大学公開講座 「体力」と体力測定	地域住民の体力向上、健康増進	日本体育大学(運動生理、衛生公衆衛生、健康管理、 発育発達、健康教育、体力測定評価、体育研究所)	平成24年度第1回公開講座として、公開講座とセットで実施。近隣住民が中心	228
講座	H24 11.17	健志台キャンパス 1号館1201教室	平成24年度第1回日本体育大学公開講座 「体力」と体力測定	「体力」	日本体育大学	平成24年度第1回公開講座として、体力測定とセットで実施。近隣住民が中心	30
講座	H25 3.30	世田谷キャンパス 記念講堂	平成24年度第2回日本体育大学公開講座	「体力測定と体力医学」	日本体育大学	近隣住民が中心	50
学生による活動	H24 9.29-30	世田谷区総合運動場	学生が主体となる地域・社会貢献活動 第37回合同運動会	「障害のある人もない人もお年寄りと一緒に秋の一日を楽しく過ごそう」をスローガンに運動会を通じて参加者の身体機能及び体力の増進と維持を目指すとともに、参加団体間の相互理解と交流を深める。	世田谷区身体障害者福祉協会 厚生車両福祉協会 世田谷区IKK福祉協会 (社会体育研究会)	区内の障害のある人、お年寄り、特に障害のある子どもたち、関連支援団体のの方々	1000
学生による活動	H25 2.23	世田谷キャンパス スポーツ棟 メインアリーナ	学生が主体となる地域・社会貢献活動 ヤングバレーボール ウィンターキャンプ	地域の小中学生とバレーボールを通して交流を深めバレーの楽しさと技術向上を図る	女子バレーボール部	区内の小・中学校のバレーボール部員	28
地域との連携によるイベントへの参加協力	H24 8.6	瀬谷区 瀬谷スポーツ センター	平成24年度 せやこども大学	「チャレンジしてみよう!初心者歓迎!誰でも簡単に跳べちゃうダブルダッチ教室」 市内大学と連携して開催する子ども体験学習	瀬谷区役所 (ダブルダッチサークル)	区内在住・在学の小中学生	40
地域との連携によるイベントへの参加協力	H24 9.29-30	横浜市みなとみらい 21地区	ココハマ大学まつり 2012	-市内28大学と地域がつながるまち-	大学・都市パートナーシップ協議会 横浜市政策局(応援団部、チャリダー部、プラス バンド部、ダブルダッチサークル)、ヒップホップ同好会、 幼児教育保育科、具志堅教授、事務局)	横浜市民	10000

### TOPICS

## 平成24年度卒業式、学位記授与式について

平成25年3月10日(日)、東京・世田谷キャンパス スポーツ棟メインアリーナにて、平成24年度卒業式(日本体育大学体育学部 第61回卒業式、日本体育大学女子短期大学部 第59回卒業式、日本体育大学 専攻科 第42回修了式、日本体育大学女子短期大学部 専攻科 第5回修了式)を挙行了しました。体育学部、日本体育大学体育女子短期大学部、専攻科合わせて1,550名あまりの学生が本学を巣立っていきました。会場には卒業生、保護者合わせて3,500名もの方々に参加いただきました。



同日午後からは場所を教育研究棟記念講堂に移して、大学院学位記授与式(体育科学研究科 博士前期課程 第37回学位記授与式、体育科学研究科 博士後期課程 第13回学位記授与式)が行われ、43名の学生が所定の課程を修了し、学位記が授与されました。

### TOPICS

## 平成24年度 東日本大震災復興支援プロジェクト活動報告会が開催されました。

本学では、震災直後よりプロジェクトを立ち上げ、岩手県、宮城県、福島県の被災地において、平成24年度までに56団延べ817名の教職員、学生が現地の方々とともに支援活動を行ってきました。

平成25年2月27日(水) 東京・世田谷キャンパス記念講堂にて、「平成24年度東日本大震災復興プロジェクト活動報告会」が開催され、平成24年度の活動を総括するとともに今後の支援活動について意見交換がなされました。



TOPICS

平成24年度 退職者紹介

落合 卓四郎 (おちあい たくしろう)

昭和40年東京大学理学部卒業。42年同大学院理学系研究科博士前期課程修了。44年米国ノートルダム大学博士課程修了 (PH.D学位取得)。東京大学理学部教授、同大学数理学部研究科長、同大学附属図書館長等を経て平成16年本学教授。副学長、学長代行、学長ほか歴任。日本数学会評議員・理事、日本応用数学会評議員、数理学振興財団評議員、文部省高等教育関係審議会専門委員、文部省学術国際関係審議会専門委員、数学教育学会会長ほか歴任。

藤本 英男 (ふじもと ひでお)

昭和42年本学卒業後、本学助手、講師、助教授を経て平成18年教授。学友会レスリング部部長、学友会副会長ほか歴任。日本レスリング協会強化委員長・評議員、東日本学生レスリング連盟理事・常務理事・副会長、全日本学生レスリング連盟理事長ほかを歴任。日本整形外科スポーツ医学会、日本体育学会、日本体力医学会にて活動。朝日賞、文部省スポーツ功労賞、全日本大学選手権大会優秀監督賞、全日本学生王座決定戦優秀監督賞ほか受賞。

村上 修 (むらかみ おさむ)

昭和42年東京教育大学体育学部卒業。45年同大学院体育学研究科修士修了。昭和46年本学助手。講師、助教授を経て平成14年教授、女子短期大学 (部) 教授。短期大学部長、体育学部長、健志台教学局次長、寮監長、学友会行事委員会委員長、文芸部部長、体育研究サークル顧問、応援部統括部長、応援部部長ほか歴任。日本体育学会評議員。

山本 郁榮 (やまもと いくえい)

昭和44年米国東ミシガン州立大学体育学部修了。45年本学卒業後、副手、助手、講師、助教授を経て平成5年教授。学友会レスリング部コーチ、応援部部長、トレーナー研究会顧問ほか歴任。日本アマチュアレスリング協会強化委員会強化コーチ、全日本女子レスリング連盟常務理事、全国少年レスリング連盟理事、日本オリンピック委員会強化スタッフスポーツコーチ、NPO法人日本スポーツネットワーク理事長ほか歴任。日本体育学会、日本体力医学会ほか所属。

森 徹 (もり とおる)

昭和45年横浜国立大学教育学部卒業。横浜市内小学校教諭、副校長、校長、横浜市教育委員会事務局指導主事を歴任。平成20年本学非常勤講師。准教授を経て平成24年教授。全国特別活動研究会副会長・顧問、神奈川県公立小学校長会会長・顧問、関東甲信越地区小学校長会副会長、全国連合小学校長会理事、日本学校図書館学会編集委員会委員長、中央教育審議会豊かな心をはぐくむ教育の在り方に関する専門部会委員ほか歴任。文部科学大田表彰受賞。

松本 茂 (まつもと しげる)

昭和45年本学卒業後、本学副手、助手、講師、准教授を経て平成4年教授。武道学科長、学友会相撲部部長、合気道部部長ほか歴任。日本学生相撲連盟副理事長、日本相撲連盟参与、東日本学生相撲連盟幹事・常任理事、日本オリンピック委員会強化スタッフほか歴任。日本武道学会、日本体育学会所属。

TOPICS

平成25年度 入学試験結果

平成25年3月18日現在  
アドミッションセンター

■大学/体育学部

※ ( ) 内は女子内数 ※倍率=受験者数÷合格者数

Table with columns: 区分, 志願者数, 受験者数, 合格者数, 倍率. Rows include 体育学科, 健康学科, 武道学科, 社会体育学科, and 合計.

※ A O入試はトップアスリート A O入試、各学科 A O入試、併設校 A O入試、地域ブロック A O入試を含む。
※ 推薦入試は推薦入試 I 期、推薦入試 II 期を含む。
※ 一般入試は一般入試 A 方式、一般入試 B 方式、帰国生入試、外国人留学生入試、リカレント入試を含む。
※ 一般入試合格者は補欠繰上合格者を含む。

■日本体育大学大学院 体育科学研究科

Table with columns: 区分, 志願者数, 受験者数, 合格者数. Rows include 博士前期課程 and 博士後期課程.

TOPICS

平成25年度 新採用教員紹介

- ① 職名
② 所属学部
③ 所属学科
④ 研究領域
⑤ 最終学歴
⑥ 学位



角屋 重樹 (かどや しげき)

- ① 教授
② 児童スポーツ教育学部
③ 児童スポーツ教育学科
④ 理科教育
⑤ 広島大学大学院教育学研究科博士課程教科教育学 (理科教育) 専攻単位修得満期退学
⑥ 博士 (教育学)



島田 功 (しまだ いさお)

- ① 教授
② 児童スポーツ教育学部
③ 児童スポーツ教育学科
④ 算数科教育
⑤ 岐阜大学大学院教育学研究科カリキュラム開発専攻修了
⑥ 修士 (教育学)



猪瀬 武則 (いのせ たけのり)

- ① 教授
② 児童スポーツ教育学部
③ 児童スポーツ教育学科
④ 社会科教育
⑤ 宇都宮大学大学院教育学研究科修士課程修了
⑥ 博士 (教育学)



三好 仁司 (みよし ひとし)

- ① 教授
② 体育学部
③ 教養・教職科
④ 教育学
⑤ 広島修道大学人文学部英語英文学科学卒業



白旗 和也 (しらはた かずや)

- ① 教授
② 体育学部
③ 教養・教職科
④ 教職教育
⑤ 東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程保健体育専攻体育科教育コース修了
⑥ 修士 (教育学)



関根 正美 (せきね まさみ)

- ① 教授
② 体育学部
③ 体育学科
④ スポーツ哲学
⑤ 筑波大学大学院博士課程体育科学研究科体育科学専攻単位取得満期退学
⑥ 博士 (体育科学)



後藤 彰 (ごとう あきら)

- ① 准教授
② 体育学部
③ 教養・教職科
④ 教職教育
⑤ 日本体育大学体育学部体育科学卒業



今野 哲 (こんの あきら)

- ① 准教授
② 体育学部
③ 教養・教職科
④ 文学
⑤ 二松学舎大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学
⑥ 修士 (文学)



安達 瑞保 (あだち みずほ)

- ① 助教
② 児童スポーツ教育学部
③ 児童スポーツ教育学科
④ 栄養教育
⑤ 共立女子大学大学院家政学研究科食物学専攻修了
⑥ 修士 (家政学)

■日本体育大学 児童スポーツ教育学部 児童スポーツ教育学科

Table with columns: 区分, 志願者数, 受験者数, 合格者数, 倍率. Rows include 児童スポーツ教育コース, 幼児教育保育コース, and 合計.

※ 一般入試合格者は補欠繰上合格を含む。

■日本体育大学 体育学部 編入学

Table with columns: 区分, 志願者数, 受験者数, 合格者数. Rows include I 期 and II 期.

■日本体育大学 体育専攻科

Table with columns: 志願者数, 受験者数, 合格者数. Row includes 2 (1).

■日本体育大学女子短期大学部 専攻科保育専攻

Table with columns: 志願者数, 受験者数, 合格者数. Row includes 35.

Table with columns: 区分, 志願者数, 受験者数, 合格者数. Rows include 博士後期課程.



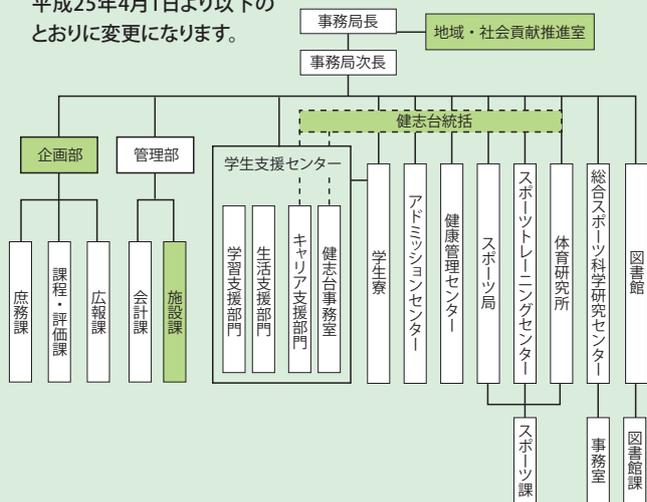
■平成25年度 学年暦

	月 日(曜日)	行 事
平成25年2013	3(水)	入学式
	4(木)～10(水)	新入生オリエンテーション (履修申告、学生証手続、健康診断、スポーツテスト他)
4	4(木)～10(水)	在学生オリエンテーション(健康診断他)
	11(木)中旬～29(月)	前学期授業開始 養護実習(健康学科・健康教育4年) 通常授業(昭和の日振替休日)
5	下旬	教育実習(大学4年)、教育実習(短大体育科2年)
6	3(月)～21(金)下旬～	教育実習2(短大幼児教育保育科2年) 相談援助実習(健康学科・福祉支援4年) [9月下旬迄]
	6(土)～14(日)15(月)下旬～	水泳指導実習・日赤水上安全法コース(体育学科2年) 通常授業(海の日) 介護等体験[3月末迄] (健康、社会体育2年、体育、武道3年、短大体育1年)
7	30(火)	前学期授業終了
	31(水)～8/3(土)31(水)～8/9(金)	ゴルフ理論・実習(社会体育学科3年) 補講、追・再試験期間
8	8月上旬～8月上旬～10(土)～10(土)～20(火)	社会教育実習(社会体育学科3年)[9月下旬迄] 看護臨床実習(健康学科・健康教育3年) 夏季休業[9/22(日)迄] キャンプ指導実習(体育、武道学科2年) キャンプ実習(短大体育科1.2年)
	22(木)～25(日)25(日)～9/7(土)	マリンスポーツ理論・実習(社会体育学科2年)1団 キャンプ理論・実習(社会体育学科2年) 国際交流実習(短大体育科2年)
9	1(日)～4(水)4(水)～11(水)8(日)～11(水)10(火)～16(月)17(火)～20(金)20(金)23(月)23(月)～10/4(金)	野外活動実習(児童スポーツ教育学科1年)1団 ゴルフ指導実習(体育学科3年) 野外活動実習(児童スポーツ教育学科1年)2団 水泳指導実習・ダイビングコース(体育学科2年) マリンスポーツ理論・実習(社会体育学科2年)2団 開学記念日 後学期授業開始、通常授業(秋分の日) ホームルーム期間
	11	1(金)～3(日)4(月)
12	23(月)24(火)～25(水)～29(日)	伝統芸能実習Ⅰ(武道学科2年) 伝統芸能実習Ⅱ(武道学科3年) 比較舞踊学実習(武道学科3年) 通常授業(天皇誕生日、12月授業終了) 冬季休業[1/5(日)迄] スキー理論・実習(社会体育学科2年)
	平成26年2014	6(月)24(金)27(月)～
2	9(日)～19(水)11(火)～21(金)中旬	スケート指導実習(体育・武道学科3年) スケート実習(短大体育科1・2年) スキー指導実習(体育・武道学科2年) スキー実習(短大体育科1・2年)
	20(木)～23(日)24(月)～28(金)	伝統文化交流実習・外国語実践実習(武道学科3年) スケート理論・実習(社会体育学科3年) ホームルーム期間
3	10(月)11(火)～	卒業式 春季休業[31(月)迄]

注)実習等の期間については、変更することがあります。

■事務組織の改編

平成25年4月1日より以下のとおりに変更になります。



【編集後記】新入生の皆さん入学おめでとうございます。新年度を迎え、大学も児童スポーツ教育学部という新たなステージが始まりました。新入生や在学生のみなさんもそれぞれ目標や希望に向けて気持ちを新たにしていると思います。新年度最初の発刊にあたり、みなさんが、それぞれの目標に向かって挑戦し、前進を続けて欲しいという想いからテーマを「チャレンジ」としました。是非、チャレンジ精神を忘れずに前進を続けて頂きたいと思ひます。困難にぶつかったり、思い通りの結果が出ない事もあると思ひますが、諦めず、妥協せず、一日一日、今日よりも明日と前進して頂きたいと思ひます。結果を急ぐ必要はありません。個々のフィールドで派手さはなくても、将来の夢に向かって何があっても崩れない、盤石な土台を築いて頂きたいと思ひます。チャレンジ日体!

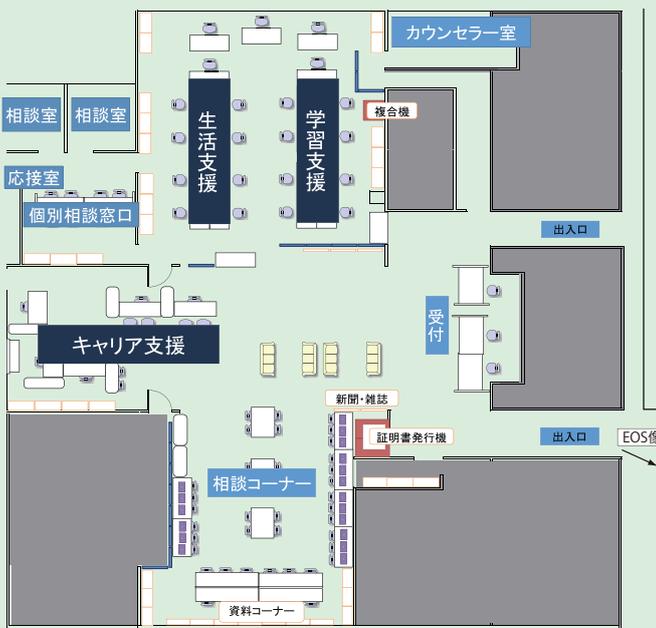
■東京・世田谷キャンパス学生支援センターが新しくなりました!

学生支援センターは、学習支援部門、生活支援部門、キャリア支援部門の3部門と健志台事務室からなり、学生の皆さんが本学において各自の資質や能力の向上を図っていく上で必要となる「学習」「生活」「キャリア」における支援をトータルで行っています。

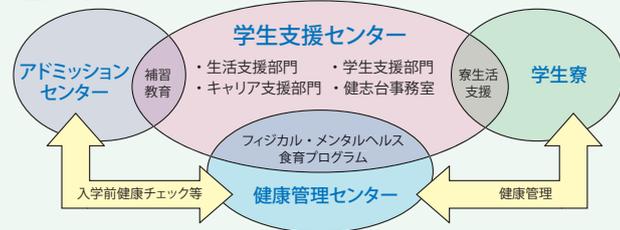
東京・世田谷キャンパス 学生支援センターは、更なる機能と学生サービスの向上を図るため、平成25年4月から東京・世田谷キャンパス 教育棟1階に集約され、ワンストップ化が実現しました。

学生のみなさんは、学生支援センターを十分に活用してキャンパスライフをより豊かなものにして頂きたいと思ひます。

【学生支援センター 見取図】



学生支援センターの機能



■東京・世田谷キャンパス⇄横浜・健志台キャンパス間のシャトルバス運行

◆運行期間(予定)

前学期 平成25年4月11日(木)～平成25年8月9日(金)  
後学期 平成25年9月23日(通常授業)～平成25年12月23日(金)  
平成26年1月6日(月)～1月30日(木)、2月5日(水)～2月10日(月)  
2月24日(月)～2月28日(金)  
※運行期間中、土日、祝祭日は除きます。

◆時刻表(予定)

●東京・世田谷キャンパス(ロータリー)発⇄横浜・健志台キャンパス(陸上競技場横)着

世田谷	7:45発	9:25発	11:40発	12:20発	14:50発	16:20発
健志台	8:50着	10:30着	12:45着	13:25着	15:55着	17:20着

●横浜・健志台キャンパス(陸上競技場横)発⇄東京・世田谷キャンパス(ロータリー)着

世田谷	9:10発	10:50発	11:40発	12:20発	14:50発	16:20発
健志台	10:15着	11:55着	12:45着	13:25着	15:55着	17:20着

※各時刻 大型バス(45人乗り)

※上記時刻表は予定になります。交通状況等により変動する場合があります。

※詳細については、学生支援センターにお問合せ下さい。